

ハイパー能「睡蓮」

2019年8月23日(金)19:30 開演

第0 藝術

私の兄、櫻井直樹が、スイカの最も熟成した期日を周波数によって予見する装置を開発していたころ、熟成したスイカの周波数から倍音(特に音圧 dB の大きい周波数)を取り出して音階を作ってみた。「ガムランの音がする!」と電話先で兄が叫んだのが始まりで、熟成したスイカから導かれた倍音を持つ楽器「ポリゴノーラ」の製作が始まった。

その話を灰野敬二氏にしたのが、さらなる「次の始まり」で、兄が広島から持ってきたポリゴノーラを見た灰野さんは、ある一つのポリゴノーラを何度も叩いた。その後、ポリゴノーラの演奏を始めてくださり、自他ともに認めるポリゴノーラの最もよき理解者となった。灰野さんの様々なアドバイス、意見から楽器の改良は急速に進められていった。

生け花パフォーマンスをする加藤ひろえさん。初めて会った対バンでは、ご一緒しなかったが、そのおかげでお互いのパフォーマンスを見ることができた。ライブのあと、「何か一緒にやりましょうよ」と、加藤さんが声をかけて下さった。私の学んだ天台声明で花といえば「蓮」。今回のパフォーマンスで最後に演奏する「後唄(ごばい)」は、「泥水に浸かることのなき、清き心を持たれし方(仏)」と唱えられる。

「蓮」、「ポリゴノーラ」。何気に浮んだモネの「睡蓮」のビジョンから、モネの生涯を改めて読み直してみると…彼が生きた場所は、セーヌ川を離れることはなかった。

浮世絵の影響を受けた絵画のムーヴメント「ジャポニズム」で最も有名な「ラ・ジャポネーズ」を描いたモネでもあるが、1892-93年、モネは「ルーアン大聖堂」の連作を制作する。ルーアンとは…そうジャンヌ・ダルクが処刑されたところ。かつて私がジャンヌを偲んで訪れた場所。キリスト教徒にとって火刑は、救い主とともに「復活の日」を迎えることのできない葬り方。残骨灰となったジャンヌの亡骸はセーヌ川に流れている。

モネはルーアンからも戻って、1893年から日本の太鼓橋のかかる睡蓮の庭を作り始める。

1840年、モネの生まれた年に写真の技術は登場した。パトロン、偉人の肖像画は写真家に任せ、画家たちはキャンパスを持ち、外へ飛び出した。自然、風景を描こう。画家にしか描くことのできない世界。それは揺らめく影、風のように遊ぶ光。

水面に浮かぶ睡蓮が、再びポリゴノーラを思い出させる。

そんなことに思いながら、今年の6月に京都の永観堂を訪ねると、睡蓮の花が咲いていた。睡蓮は茎が水面下に伸びている。葉は水面上に浮かび、花も水面上に咲かせる。今の写真の技術なら水面下の茎も写すことができる。そうではなかったモネの時代、水面下の世界は、本人が睡蓮に出会わなければ見ることはできなかった。

モネが出会ったジャンヌの物語。

「睡蓮」あらすじ

火刑となったジャンヌ・ダルク(1412~1431)の残骨灰はセーヌ川へと流された。ジャンヌの霊はセーヌに漂っている。生涯をセーヌ川沿いで過ごすクロード・モネ(1840~1926)。キャンパスを外に持ち出す風景画家の時代に写真の技術(1840年~)が登場する。写真は事実を写し出した。しかし川の底を撮ることは当時なかった。森をさまようモネに現われた睡蓮。その睡蓮の水底の茎の中にジャンヌの霊は絡まっている。モネは自宅の庭にセーヌの水を引き、睡蓮の庭を作った。水底より立ち上がる妖精。モネの眼から光が失われてゆく頃、睡蓮の花に遊ぶジャンヌはモネに光を与えた。

「睡蓮」台本

原作・脚本:桜井真樹子

妖 精: 衆罪如霜露(しゅざいにょそうろ)人の罪 かなき霜露のごとく 朝の陽に消え、除かれん
ゆえに心を発起し 六情の罪を懺悔す
鬱蒼の森に漏れし あしたかな 鳥さえずりて 夢覚めにけり
カゲロウの瞳 川面を映せれば 翅朝霧に揺らぎけり
我は蒼黒の水籠に息づく 異端と呼ばれし精霊なり
懺悔六情根(さむげろくじょうこん)

モ ネ: 千歳を超えて来たりしは、光を描く絵描きかな 光を描く絵描きかな
木々に映えたる 陽の光 幾重も紡ぎ 描きたり 水面を愛でて 川に住み 離れることぞ 未だなく
亜麻布に 人の姿は消え去りて わが筆は たゆとう光に 遊びけり
水底にうごめく世界を 見つめれど まなこより 光は消えゆきて 蒼黒に迷う わが心
未だ光は 消えず 暁に 川逍遙に遊ぶれば 今朝の陽も 嶺より昇り わがひとみに 映したり
頬を溶かし 笑みこぼし ああ 我に 光の糧を与え給え

ジャンヌ: 蔓は天を覆ふのごとく 睡蓮の茎は水面を覆ふ 戦いに勝利をおさめど
妖と訴へられ 焼かれし肢体は 灰燼となり 川を流る
怒りの涙は雷下し 祟りをなして水沼に沈む 森に叫べば呼子鳥 木の実 貪れば木の実鳥
世は末法となりたれば 来し方の 怪し女となりけり

ジャンヌ: 絵描きは水底に我を見つけ

モ ネ: そこに光の求むれば、そこに光の求むれば

地 謡: 四つの瞳に涙は光り 普き朝日の恵みを受けて 蔓もかかる涙も ほろほろと解けひろければ
睡蓮の茎も解けひろげたり 精霊は水沼を離れ 水面に花を浮かばせり 絵描きは水を引き寄せて
睡蓮の池 作りたり 睡蓮の池 作りたり

ジャンヌ: 水籠の日々よ いざさらば ありしニンフの羽広げ

地 謡: 昔を今に返すなる 水面の 睡蓮と舞いにけり 睡蓮と舞いにけり

ジャンヌ: 願我在道場香華供養佛(がんだざいどうじょうこうげくようぶ)

光の水面 絶えずして ニンフは七色に 彩て 羽の飛沫は 輝きぬ

絵描きの心に 光は戻り 筆はニンフと 共に舞ひ遊ぶ

所世界如虚空(しよせいかいじょこく)如蓮華不着水(じょれんがふちやくすい)

心清浄超於彼(しむせいじょうてうよひ)

この世は虚空のごとく 泥水に付くことのなき 睡蓮のごとく 遥かに清き心持たれし方 我ここに敬礼す

稽首礼無上尊(けいしうれいぶしよそん)

シテ:桜井真樹子(妖精、ジャンヌ・ダルク、龍笛)

ワキ:灰野敬二(クロード・モネ、ポリゴノーラ)

後見:加藤ひろえ(蓮、生け花)

スタッフ:大木文佳

デザイン:あがさ